

SAPPORO 教区 NEWS 第36号

発行：カトリック札幌司教区事務局広報部
〒060-0031 札幌市中央区北1条東6丁目10

Tel.011-241-2785 / ホームページ：http://www.csd.or.jp

～クリスマスと新年を迎えるに当たって～ 2022年 年頭司牧書簡



札幌教区のみなさんに、クリスマスと新年のご挨拶を送ります。コロナ禍が3年目に入ろうとしています。今現在、感染状況は奇跡的な落ち着きを見せていますが、オミクロン株の出現によりこの文書が配信される頃の状況を予想できません。いずれにせよ、今しばらく私たちはコロナウィルスとの戦いを続けなければなりません。

時間の経過と共に、初期の頃の混乱は収まりパンデミック下でありながらも落ち着いた対応ができるようになってきました。そして、この2年近くの間には様々なことが見えてきました。コロナ以前では想像できないほど、ICT技術を使った活動が活発になりました。これは間違いないくコロナ後も有効な宣教司牧の手段となるでしょう。

そして、教会の弱点も見えてきました。集まり、直接会うことができない状況は、そのまま教会活動を停滞させることとなり、教会の外は

おろか、教会内の事柄についても関わりが途絶える傾向が顕著であったことです。平時でも社会的弱者に対する関心や関わりは教会の大切な務めですが、コロナ禍にあつて教会活動が停止し、一部のグループや個人を除けば、教会（小教区）としての働きが停止してしまいました。さらに、教会共同体としても集会の中止、分散ミサ等の影響で普段は顔を合わせていた人と会わなくても気にならなくなってしまうました。それにより、困難な状況にあつて声を出して助けを求められない人がいても、その窮状に気づかずいたり、連絡が数ヶ月途絶えてもその人の安否に誰も気づかなかつたりしています。

これはコロナ以前からあつた教会の弱点がここに来て顕在化したと言えるでしょう。建物としての教会があつてもそこに集まることができないう今、いかにして共同体を保つのか。建物に集まらない今だからこそ、大切な本質が浮き彫りにされ私たちの現実があらわになります。高齢者に限らず、家族と離れ一人で暮らしている若者や外国籍の方が多くなっています。私たちにとつて、食べるに不自由しない生活であつても、人との関わりに飢えている状態はもつと深刻なものです。誰かとつながっているという絆の実感がその人を支える大きな糧となります。名簿に載っている人々の共同体ではなく、実際に誰かが私を気にかけてくれると言ふことを感じられるつながりこそ教会で大切にしなければならぬことです。そして、そのような関わりを必要としている人に気づくためには、コロナを理由に引きこもつてはいけません。具体的に「出向いていく」こと、そしてこれから触れる「ともに歩む」（同伴する）姿勢を持つ

た教会共同体としてのあり方が問われます。教会は、元の姿に戻る努力をするのではなく、上述した新しい可能性を取り入れ、弱点を克服した新しい姿へと変わる必要があります。それぞれの小教区におけるアフターコロナの姿を思い描き、具体的な取り組みがなされることを期待します。

さて、全世界が今もつてコロナ禍にある中、教皇様は2023年の「世界代表司教会議」（通称：シノドス）にむけて「シノドス」の歩みを全世界で開始する宣言をなされました。

新型コロナウイルス感染症のパンデミックの状況は確かに、本シノドスのプロセスの展開に影響を与えるでしょう。（中略）同時に、多くの地方教会が今後の歩みについてさまざまな疑問に直面している中、人類の歴史上の重要な時期に教会の再活性化を促進する機会を提供しています。（手引き書より）

シノドスとは数年に一度開催される全世界から集められた代表司教会議です。その時々テーマが討議され、その後教皇様の使徒的書簡が出されます。通常ですと世界各国の司教協議会へテーマの準備の質問が送付され、その回答をもつて「討議要項」が作成され、それに従つて会議が進行します。しかし、前回（「青年」がテーマ）からその様式が大きく変わりました。前回はこの質問が各国司教団のみならず、全世界の青年に向けて、ネットを含めたあらゆる層の青年（他宗教、教会を離れ教会に批判的な青年等も含めて）に向けて発信され、そうして集められた膨大な前準備の回答から、討議要項が

作成されました。本会議にも発言権を持った青年たちが参加を許され、シノドスの会議場は活気に満ちたものとなりました。このとき根本的に変わったのが、教会が青年たちを教会に戻すにはどうしたらよいかという視点ではなく、青年たちの生きている現実に出向いていき彼らと「ともに歩む」(シノドス)と言う姿勢への変化でした。

これを踏襲して、今回のシノドスは全世界の地方教会とそこにいるすべての信者から意見を聴取することにしたのです。そしてそれに向けてのプロセス自体をシノドスに位置づけ、テーマも「シノドスの教会(ともに歩む教会)のためー交わり、参加、そして宣教」です。すなわちシノドス自体をテーマとする初めての会議なのです。この聞き取りは、全世界の地方教会、小教区、修道院、学校、教会団体、使徒職グループ、移民、難民等、あらゆる人に向けられています。各国語の質問票も用意されているので、各小教区の一部の役員が回答するのではなく、すべての信者の声を聞き取るよう心がけてください。

今回のシノドスを招集することによって教皇フランシスコは、教区レベルで始まるシノドスのプロセスに、すべての洗礼を受けた人が参加するよう招いています。各教区は、このシノドスの体験の主な対象がすべての洗礼を受けた人々であることを心に留めておくよう求められています。女性、障害者、難民、移住者、高齢者、貧困にあえぐ人々、信仰をほとんど、あるいはまったく実践していないカトリック信者など、排除されてしまう恐れ

のある人々を漏らさぬよう、特別な配慮が必要です。また、子どもや若者を参加させるために、創造力に満ちた手段を見つけることも必要です。(手引き書より)

このようにシノドス(世界代表司教会議)のために、シノドス(ともに歩む)的方法を用い、全世界の信者と共にこの歩みを進めるのです。その為の方法は、一部の賢い人が質問に答えるのではなく、分かち合いを通して答えを導き出すことです。分かち合いを通してこそ、一人では思いもよらなかったところへ私たちは導かれます。分かち合いの豊かさは、そこに聖霊が働かれ、「二人三人いるところに私もいる」(マタイ18:20)と言われる主ご自身が導いてくださるところにあります。質問に対して回答をすることが目的ではありません。質問をきっかけに豊かな分かち合いが行われ、それによって気づきを与えられることが大切なのです。ですからすべての質問に答える必要はありませんし、質問の内容から離れてしまってもかまわないのです。

この聞き取りのプロセスは、分かち合い、聞く上でのオープンさを支える霊的環境で行われることがとくに重要です。(中略)このようにして、互いに耳を傾け合うわたしたちの旅は、聖霊の声を識別する真の体験となるのです。(手引き書より)

こうして、すべての信者が教会の「交わり」の中で、教会の活動に何らかの形で「参加」し、「宣教」する共同体となるように招かれています。

す。札幌教区でこの取り組みを行うに当たり、みなさんにお願いたいことがあります。札幌教区の現状はみなさんもおわかりの通り、加速度的に司祭、修道者、信徒の高齢化が進んでいます。かつて私たちは10年後の教会を見据えての対応を考えていましたが、想定していた状態は数年で現実となりました。また、5年後の司祭の数を考えて、どのように教区を運営したら良いか諮問委員会を作る予定でしたが、2022年度にその状態になってしまいました。すなわち、地区によっては主任司祭1名と数人の協力司祭しかいない体制になります。札幌地区においても、ごく限られた数の司祭で地区全体を司牧しなければならぬ状況になります。これはすなわち、司祭は各教会を巡回してミサや秘跡の執行に当たり、教会の管理運営、宣教活動は信徒が行わなければならないということです。

これまで、「複数教会を担当する主任司祭」、「ブロック司牧」、「共同宣教司牧」等いろいろ行ってきましたが常に現実が先行し、それにあつた体制を後から整えていく状態でした。これからの教区はいわばギリシタン時代の宣教司牧体制になるのです。17世紀、数少ない司祭は各地を巡回してまわり、教会は信徒によって維持され、宣教もなされてきました。しかし、教会はこの時期、すなわち迫害が起き司祭がいなくなつてから、教勢がピークになったと言われています。つまり司祭がいらない中で信徒によって宣教活動がなされ、信者が増えていったのです。

教会が生き生きとした宣教する共同体となるために、私たちがどう変わらなければならない

のか、それを模索するチャンスが今回のシノドスの歩みは与えてくれています。シノドスの質問は、教会がすべての信者とともに歩もうとしているということのみならず、私たちが社会の誰と「ともに歩もう」としているのかが問われています。私たちがどう変われば私たちの教会共同体が活性化できるのか、質問に答えて終わりではなく、それに応え続けて答えを模索する歩みを通してみなさんの教会の新しい宣教司牧のあり方を共に考えていきましょう

この意味で、このシノドスの目的は、さらに多くの文書を作成することではないことは明らかです。むしろ、わたしたちが招かれている教会についての夢を人々に抱かせ、希望を花開かせ、信頼を刺激し、傷口をふさぎ、新しく深い関係を紡ぎ、互いに学び合い、橋を架け、共通の使命のために精神を照らし、心を温め、手に力を取り戻すことを目的としています(「準備文書」32)。



仙台教区被選司教に エドガル・ガクタン師



12月8日の無原罪の聖マリアの祭日に、使徒座からこれまで空位であった仙台教区に新たに司教任命の発表がありました。喜びのうちにお知らせいたします。
仙台教区被選司教：EDGAR GACUTAN師（エドガル・ガクタン）（淳心会）。なお、司教叙階式の日程の詳細については改めてお知らせいたします。

- 1964年9月23日フィリピンで誕生
- 1986年10月19日淳心会で初誓願
- 1990年2月来日
- 1991年6月2日淳心会で終生誓願
- 1992年3月20日助祭叙階（大阪）
- 1994年4月23日司祭叙階（フィリピン）
- 1994年5月～2003年11月大阪大司教区区内小教区にて司牧
- 1996年1月～2001年12月淳心会神学生養成担当
- 2002年4月～社会福祉法人 淳心会（堺市）理事長
- 2004年1月～07年12月カトリック青年労働者連盟(JOC)全国協力者
- 2004年1月～12年12月淳心会日本管区管区長
- 2013年1月～12月サバティカル
- 2014年1月～17年3月カリタス大船渡ベース長 仙台教区第4地区担当、仙台教区外国人支援センター長
- 2017年4月～東京教区松原教会（東京大司教区）
- 2018年4月～学校法人淳心学院（姫路市）理事長
- 2020年7月～淳心会アジア管区・日本地区地区長

厳律シトー会・灯台の聖母トラピスト修道院は、2021年11月21日に創立125周年を迎えました。

当時の函館教区長ベルリオース司教様のたつての希望により、明治以降、日本における最初の

厳律シトー会 灯台の聖母トラピスト修道院 創立125周年



成長期と共に徐々に経済的にも恵まれ、1980年には大分に新しい修道院を創立することもできました。修道院が125年の長きにわたり困難に遭いながらも今日まで存続してきたのは、多くの恩人達の助けの

かけであり、諸先輩修道士の祈りと労苦と犠牲の積み重ね、そして何よりも神様からの恵みによるもので

この記念の取り組みとして、1935年

【3】 厳律シトー会の精神に従って、「祈り働け」をモットーにして、労を惜しまず開墾していきま

（昭和10年）に建てられた正面正門の屋根や壁を改修し、小さな展示室を拡張しました。修道院を訪れる一般のお客様に向け、125年間の修道院の歴史や修道生活について知っていただくパネルや写真を展示しています。特に

童謡「赤とんぼ」の作詞で有名な三木露風のパネルは注目されています。三木露風は、入会した若い志願者のための国語の先生として4年間滞任（1920～24年）し、その間に当別教会で受洗（1922年）しました。「赤とんぼ」は修道院滞在中に発表した作品です。

現在、修道士は17名となり、小さな共同体となりました。昔に比べると規律遵守は緩和された部分もありますが、聖ベネディクトの戒律に従って、世俗から距離をおき、共同生活・沈黙・聖務日課・霊的読書・労働等、諸価値をおく修道生活の本質は変わりません。弱さをもった修道士が集まる不完全な共同体にあっても、互いにありのままを受け入れ、助け合いながら、修道院は「愛の学び舎」となっています。

11月18日には、勝谷司教をお招きして、創立記念ミサを捧げていただきました。これからも聖母の御保護のもとに、コロナ禍の現代にあつて、キリストの救いによる希望の光を照らす灯台となる共同体として歩んでいけるよう気持ちを新たにしております。

（厳律シトー会 灯台の聖母修道院 大院長 横内弘）

2021年12月4日（土）10時半より北広島教会聖堂にて、勝谷太治司教司式による「北広島教会献堂125周年（1896～2021）記念ミサ」が執り行われまし

カトリック北広島教会 創立125周年



新型コロナウイルス感染症拡大防止体制の下、聖堂、小聖堂、及び信徒ホールを開放し、北広島教会の信徒のみ（参加110名）にて行われました。

当日は「コーチェーブ」にてミサを配信しました。ミサ後の祝賀会等は開催しておりません。「125周年記念行事実行委員会」の発足当初は、広く札幌教区（地区）をはじめ、北広島教会所縁の方々、地域の方々をお招きし、盛大に執り行う予定でしたが、コロナ禍の状況を鑑み、やむを得ずこの

（北広島教会 佐々木藤夫）

コロナ禍の叫び全国結ぶ CJオンラインセミナー

カリタスジャパン（CJ）全国オンラインセミナー「コロナ禍と私たち－叫びの中からも見出す希望－」が2021年11月3日開催され、全国から70名余りが参加した。午前の第一部では「コロナ禍から見えてきた〈叫び〉」と題して全国のCJ教区担当者等から報告があり、札幌教区からも難民移住移動者委員会の西委員が外国人労働者の叫びについて報告。午後の第二部は「〈叫び〉の中からも見出す希望」と題して、成井大介司教(CJ担当司教)他4名によるトークセッションが行われ、コロナ禍における教会支援の意義について分かち合った。

ような形で行うこととなりました。札幌教区の皆様へのご案内のないままでの開催となりましたことにつきまして、お詫び申し上げます。勝谷司教は記念ミサの説教（講話）の中で、この共同体の1890年（伝道所設置）からの歩みは北広島にとつて大きな役割を果たしてきたとし、「主は、このコロナ禍の中だからこそ私たちに共同体の絆・結束を求めています、どうしたら種々の問題をかかえ、困難にある人々と共に歩む（同伴する）ことができるかを全体で考えよう。」

新たな典礼への旅 ①

2022年待降節からミサ式次第と奉獻文(ミサの中心的祈り)が変更されます。この「改訂」について4回に渡って要点をお伝えします。
教区典礼委員会 委員長 上杉昌弘神父

1987年に新共同訳聖書がキリスト教会諸教派共同で原語から翻訳されました。「聖書は約40年ごとに翻訳し直すことが世界では常識になっている」ことを、最終編集者の太田道子女士から聞いたことがあります。言葉は生きて変化しているので、絶えず「現代化」が必要であるとの主旨でした。原語通りに祈禱する(仏教など)宗教も多い中で、キリスト教は経典(聖書)を、同時代の多くの人が生活の場で聞いて分かるよう訳し直されます。主イエスは生きておられ人の只中であって、今も良い知らせ(福音)を宣言されているからなのか、と思つたものです。同じ理由でミサの言葉も改訂を重ねるのでしょう。各国のミサ式次第は、ラテン語ローマ規範版(Romano tipica)に基づいて作られます。ベースとなる1970年規範版の第3版が2002年に出たから、日本でも改訂作業が20年間続けられ、昨秋に教皇認可となりました。2022年春以降、各出版社からも会衆用が発行されますので準備していきましょう。

【日本語版の改訂原則】

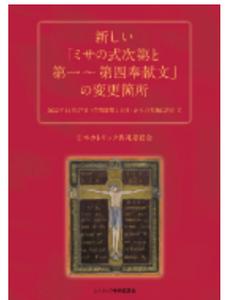
1. 規範版にある祈りは省かない(70年代版原行のものは、各国文化に適應した独自性を意欲的に取り入れたもので、ローマからも加除が承認された)。この線で、規範版の文言も尊重しています。

例：(現)「主は皆さんと共にーまた司祭と共に」⇩(新)「またあなたと共に」(et cum spiritu tuo: 直訳は「また(司祭の)あなたの霊と共に」) 日本語の「霊」を訳出するかどうか大議論されました。

2. 文語文を口語文にする。例：(現)「主よあわれみたまえ」⇩(新)

「主よいつくしみを私たちに」(主よ憐れんでください、)の案もあったが)、他の選択肢として多国籍の信者にとってわかりやすいように「キリエレyson」も復活など。

せっかく慣れ親しんだミサの言葉・・・愛着があり残念ですが、次の世代のために受け入れ、賛美と感謝の声を響かせていきましょう。主は生きておられ、私たちと共にいて語り掛けともに歩んでくださる、この教会の典礼(公の奉仕)に与るために。(次号へ続く)



11月29日、札幌教区カトリックセンターで定例司祭月例会が開催された。来年の待降節から施行される「新しい典礼」についての、第二回目の研修。講師に広島教区長の白浜満司教様、オリエンズ宗教研究所の石井祥裕氏をオンラインで招き、会場とオンライン併せ40名ほどが参加し、説明を受けながら活発な質問や意見が交わされた。質問のやり取りの中で印象的だったのは、「新しい典礼を段階的に少しずつ導入したい」との声に、それはミサの中で練習することになるので相応しくないと指摘を受けたこと。慣れるという意味であるなら、主日のミサではなく、週日のミサから導入することなどが提案された。典礼の変更は、高齢者には難しい面があるものの、この典礼が初めての正式な「わたしたちの典礼」となることを考えると、感慨深いものがある。

(教区副事務局長 佐久間力)

コロナ禍における各地区の様子

▼釧路地区 メイドインベトナム「岩窟」

根室教会はカトリック幼稚園の園舎の一部にあり、主日のミサには20〜25名ほどの信者さんが来ますが、その殆どは市内の水産加工場で働いているベトナム人技能実習生です。彼ら・彼女達によって現在の根室教会は成り立っていると言っても過言ではないでしょう。ミサでは第1朗読はベトナム語、共同祈願、主の祈りは日本語とベトナム語、時々ですが閉祭ではベトナムの聖歌を歌ってくれる時もあります。またミサ後の掃除や消毒等も積極的に手伝ってくれます。ベトナム人実習生達は今や根室教会になくはならない存在となっているのです。

待降節の「馬小屋」作りは、この人達にお願いしていますが、喜んで作ってくれます。

今年は11月28日(待降節第1主日)のミサの後に作ってくれました。ベトナム語が飛び交う中、楽しそうに作っていました。そして、完成後には、皆、故郷の両親家族に送ると言っていてスマホで写真を撮っていました。彼等・彼女達を作る「馬小屋」は、とにかく南国風(トロピカル)と言つか、キラキラ感があつて・・・ミサに集中出来ないことが難点と言えば難点です。

ところで今回初めて分かったことですが、日本では「馬小屋」で通じるのですが、ベトナムでは「岩窟」と言うのだそうです。「岩」にこだわったメイド・イン・ベトナムの馬小屋(岩窟)が今年も完成しました。

(根室教会主任 内藤孝文)

▼旭川地区 旭川地区大会その後

前号にての今大会の概要と経過に続き、今回は期間中の取り組みについて。

まず「大会の祈り」カード作成して地区内の全共同体に配布し、「出会いの困難を乗り越えて互いを理解し、励ましあえるものとなるように」とミサ



前等に祈った。

司教ミサのライブ配信(リモートミサ)は概ね好感を持って受け止められた。聖堂にスクリーンを設置して皆で視聴した教会、聖堂にて参加者それぞれがスマホやタブレットで視聴した教会と、それぞれの状況に応じた対応が見られた。「同時進行の一体感があったし、なにより今後の教会の状況(司祭の減少、信徒の高齢化)を考えると、これからの典礼のひとつの形として、考えてもいいのかもしれない。」という意見も多く見られた。(旭川地区カトリック大会、司教ミサにて検索、視聴可)

大会テーマ「自ら考え出向いて行く 共同体—いつも派遣されている私たち—」についての意見、分かち合いの結果も募った。「この状況で、どこへ出向いて行けばいいのか」という意見もあれば、「ただ待つのではなく、何ができるのかを考え続けることが大切だ」と思ったり、「自分が『派遣されている』という感覚は新鮮だった」等の意見もあった。

「自ら出向いて行く」行動のひとつとして、自らが支援当事者として活動するため、旭川地区内で生活する外国人を支援するための団体「ナムタイ—旭川地区手をつなぐ会—」を立ち上げ、事務局を旭川五条教会に設置した。「ナムタイ」とはベトナム語で「手をつなぐ」の意

「互いに声を掛け合うように」との

メッセージ

カードを地区内に募り、「皆さんお元気ですか」「来年は会いましょう!」



等、約150枚のカードが集まった。寄せられた沢山の声を集約して地区内で共有する作業は未完であるが、紙媒体やネット上にて地区信徒のみならず、教区の皆さんの目にも触れていただくことができるようにしていきたい。そして、今大会を通して信徒が思い考えたことが、大会ご入れ替わりで始まった「シノドスへの歩み」に繋がり、これからも共に歩んで行けますようにと祈る。

(実行委員長 旭川六条教会 荒木閑 充)

▼札幌地区

月形藤の園2年ぶりのミサ

11月6日(土) 新田教会の聖堂において社会福祉法人藤の園の入居者を対象にミサ(司式・勝谷太治司教)が行われた。入居者にとっては2年ぶりとなるミサであった。4月から、何とか藤の園の方々にミサを提供できないものかと施設側に相談を持ちかけ、施設職員の協力も得られてミサに与る機会を提供することができた。ミサは15時開始。高齢者や施設職員は着替えや移

動に時間がかかり、またミサ後も夕食前の準備を考えるこの時間が唯一の時間。勝谷司教の許可を得て特別に翌日の主日のミサとすることができ、参加者は主日の義務を果たすことが叶うようになった。今後しばらくはまだ新田教会の信徒との交わりができないが、分散型共同体としてそれぞれの使命の中でミサに与ることができるようになった。ミサの冒頭で勝谷司教は「今まで待たせて申し訳ありません」という謝辞から、説教でもコロナの怖さとそれを乗り越える新しい時代について励ましを送った。参加者は待ち望んでいたミサ、安堵の思いでミサを味わった。当日は谷内武雄神父様も車いすで共同司式され、シスター方も久しぶりの司教ミサに感激の言葉が漏れた。



12月から始まった入居者の方々のための聖体拝領式。分散共同体の使命に一人一人が関わっています。

また12月より土曜の夕方に藤の園入居者の方々のために主日のミサを行い始めた。まだコロナの不安を抱えた福祉施設としては、一般の信徒の方との交わりに難しさを感じ、思い切つて分けてもミサに与ることができないかとのことから、千徳康雄神父の協力のもと執り行い始めた。また併せて毎日のミサに与れないことから、定期的に行う聖体拝領式も始めた。同所で入居されている谷内武雄神父が「車いすでもできることがある」と、積極的に協力している。朗読も説教も少しずつ力強い言葉となり、多くの入居者の励みとなっている。小さい共同体の中で最大限の可能性を探り実行を移している藤の園は、今一番ウイズコロナに近い活動を展開しているのではないだろうか。(新田教会主任 松村繁彦)

▼苫小牧地区

室蘭教会献堂130周年行事

ヴァイオリン演奏会 感動を呼ぶ

昨年8月30日献堂130周年の記念ミサを捧げた室蘭教会では、コロナ禍により延期を繰り返していた祝賀行事、吉井眞琴さんとその門下生による演奏会「ヴァイオリンは歌う」を11月28日(日)に開催、待ち望んでいた演奏会に集まった信徒らは喜びを分かち合った。吉井さんは室蘭市に中学卒業まで在住、桐朋学園女子高校、同大学、同研究科を卒業後、オーストリア国立音楽



大学で学び世界で活躍、その後約30年間、毎月来蘭し後進の指導に当たっている。一昨年11月、当時の主任司祭である小林神父に相談があり、昨年2月から当教会ホールがそのレッスン場となっていた。今回の演奏会は「聖堂で演奏会をさせてほしい」という吉井さんの強い希望により実現した。演奏会はコロナ感染症対策のもと、午後一時と四時の二回行われ、それぞれ50人、67人が来場した。門下生(小中学生)による2曲(15分)、吉井さんによるショーンソンの詩曲(15分)と休憩(10分)を挟んでのフランクのヴァイオリンソナタ(30分)に聴衆は魅了された。4時の部途中では、吉井さんは後方に座っていた小林神父を最前列に招き、「天(あめ)には栄え」を捧げる場面もあり会場を和ませた。130年の祝祭にふさわしい、大きな感動を与える演奏会となった。(室蘭教会 田中賢治)

札幌教区内のカトリック園とカトリック学校 学校と教会の連携・活性化につなげるためには

札幌教区内には、北海道カトリック幼保連盟や北海道中高連盟に加盟している事業体が、幼稚園・こども園55園、保育園3園、カトリック学校8校（中高一貫校5、高校のみ3）、日本カトリック大学・短期大学連盟に加盟している事業体2大学があり、いずれもキリスト教の価値観・人間観・世界観に基づいた教育・保育活動を行っています（別表）。

これらカトリックの教育機関にお預かりしている子供たちは、中学校から大学まで7,423名、幼稚園・こども園では4,678名、合計すると12,101名（2019年度統計。保育園を除く。）にもなり、札幌教区内信徒総数にも迫る数です。

2019年の年頭司牧書簡において、勝谷太治司教はカトリック学校と教区との関わりについて、以下のように述べられました。

「小教区には青年がいなくても、学校にはたくさんの方がいるのです。現代、多くの青少年にとって信仰と出会う唯一の場は、ミッションスクールであるときえ指摘されました。とはいえ、外国のカトリック校は生徒や教職員のもとでカトリック信者である

前提に立った議論でしたので、日本の現状とは違います。しかし、ほとんどが信者ではないが故に、そこに福音を述べ伝えるのはなおのこと大切なことです。そして、その機会を苦勞する事なく得られるのです。多くの教師や生徒はカトリックの理念を受け入れることを承諾して学校にきています。（中略）宗教科の信者の先生や、司祭修道者のチャプレンがいらないことが地方の学校の悩みですが、すぐそばに小教区があり、うまく学校と小教区活動を連携させれば、双方の活性化につながるのではないかと期待しています。小教区の皆さんの理解と協力、さらに積極的な働きかけをお願いします。」

今から3年前、勝谷司教は、小教区の皆様のご理解と協力を年頭司牧書簡で以上のようにお願いされました。これを受けて私たちが思い浮かべるひとつ具体的な例として、函館地区にお

る「青年交流会」が挙げられるでしょう。活動のモットーは、「Think Globally, Act Locally」です。函館地区にあるカトリック学校と教会が中心となって始められた活動ですが、現在では、主にベトナムやフィリピンからの技能実習生や大学生も加わり、全ての人に開かれた社会的な活動を展開しています。名称も、「カトリック函館地区中高生会」から、「カトリック函館地区青年交流会」と改称し、信徒のみの枠を超えたより広い繋がりに成長しています。

別表をご覧ください。これだけ多くのカトリック学校（園）が教区内にあって、日々、より良い教育活動を目ざし邁進しています。これらの学校の近くにお住まいの方、あるいは所属教会が近い方、いらつしやいませんか？

この紙面をお借りして、勝谷司教の年頭司牧書簡にある課題、「学校と小

教区活動を連携させ、双方の活性化につなげる」には、何き、どのようにすればよいか、皆さまも是非、一緒にお考え戴ければ幸いです。

いま、多くのカトリック学校やカトリック園が、少子化の日本にあつて、私学としての経営の難しさ、カトリック教育の継承という難題に直面しています。これからも引き続き、教区の皆さまの温かいご理解とサポート、お祈りを心よりお願い申し上げます。

（教区カトリック教育担当
品田 典子）

●日本カトリック大学・短期大学連盟 2学
【札幌市】藤女子大学 天使大学

●北海道カトリック中高連盟 8校
【札幌市】札幌聖心女子学院中学高等学校、藤女子中学高等学校、札幌光星中学高等学校
【函館市】函館ラ・サール中学高等学校、函館白百合学園中学高等学校【旭川市】旭川藤星高等学校【室蘭市】海星学院高等学校【北見市】北見藤高等学校

●北海道カトリック幼保連盟
（幼稚園・認定こども園） 55園

【札幌市】認定こども園カトリック聖園こどもの家、さゆり幼稚園、藤幼稚園、天使幼稚園、真駒内聖母幼稚園、虹の森カトリック幼稚園【石狩市】花川マリア認定こども園【小樽市】小樽藤幼稚園【倶知安町】認定こども園倶知安藤幼稚園【北広島市】広島天使幼稚園【江別市】大麻藤認定こども園【長沼町】長沼カトリック聖心幼稚園【岩見沢市】岩見沢天使幼稚園【函館市】認定こども園函館藤幼稚園、認定こども園カトリック湯の川幼稚園、認定こども園元町白百合幼稚園、函館白百合学園幼稚園【長万部町】長万部マリア幼稚園【八雲町】認定こども園八雲マリア幼稚園【七飯町】七飯マリア幼稚園【江差町】江差幼稚園【旭川市】旭川聖母幼稚園、旭川藤幼稚園、旭川白百合幼稚園、旭川天使幼稚園、旭川みその幼稚園【砂川市】砂川天使幼稚園

【美瑛市】美瑛アカシア幼稚園【富良野市】富良野聖園幼稚園【留萌市】留萌聖園幼稚園【羽幌町】羽幌藤幼稚園【土別市】カトリック土別幼稚園【名寄市】名寄カトリック幼稚園【苫小牧市】苫小牧聖母幼稚園、苫小牧藤幼稚園【登別市】登別カトリック聖心幼稚園【室蘭市】ベネディクト幼稚園【帯広市】帯広藤幼稚園、柏林台カトリック幼稚園【池田町】池田カトリック幼稚園【本別町】認定こども園ほんべつ【釧路市】認定こども園釧路カトリック幼稚園、釧路聖母幼稚園、認定こども園釧路ひばり幼稚園【厚岸町】厚岸カトリック幼稚園【根室市】認定こども園根室カトリック幼稚園【中標津町】認定こども園中標津カトリック幼稚園【北見市】認定こども園北見マリア幼稚園、認定こども園北見聖母幼稚園、認定こども園留辺蘂マリア幼稚園【美幌町】認定こども園美幌藤幼稚園【網走市】認定こども園網走藤幼稚園【遠軽町】認定こども園遠軽ひばり幼稚園【紋別市】認定こども園紋別藤幼稚園

●北海道カトリック幼保連盟（保育園） 3園
【札幌市】カトリック聖園てんしのおうち、羊丘藤保育園【函館市】うみの星保育園



クリスマスの準備（藤女子中学高等学校）



第7回教区正平協全道交流会

10月23日に開催した第7回教区正平協全道交流会は、成井大介新瀉司教による「コロナ禍に見つけた希望」世界各地での活動をおして」をテーマとする講演で始まった。

講演では、東日本大震災の時、ボランティアが泥掻き中に遺体を発見、泣きながら、そして喜びながら報告したことを例に、誰彼構わず『命』を大切にしたいという空気があったとのお話があった。その後、神言会総本部からの派遣により、インド、ケニヤ、トーゴ、メキシコ等の被災地を訪問され、災害に苦しみながらも必死に生きる人々を目の当たりにし、キリスト者として何を優先すべきかが問われる状況に置かれたとのことで、災害時に『自分が持っている特権について考える』とのお話しは身につまされるものがあった。



講演に続いて行われた交流会では各地区からの活動報告があった。内容は、遺骨混じりの土砂を基地の埋立に使わせない請願、北海道を核ゴミの捨て場にさせない活動、戦後76年に因み沖繩と連帯する活動、平和の折り鶴活動、船員司牧等の活動等で、道内のそれぞれの場所でのキリストの教えを実践していることが参加者に共有され、有意義な交流会となった。

(札幌教区正平協 浅井繁)

第41回 日本カトリック正義と平和全国集会 大阪大会(オンライン開催)

11月22日、23日、第41回日本カトリック正義と平和全国集会大阪大会が開催された。今大会は、初めての試みとして、オンラインでの開催となった。メイン会場の大阪カトリック聖マリア大聖堂を中心に、東京会場、札幌カトリックセンター会場と、ズームでの参加を含め、およそ千二百人が参加した。

「(すべてのいのちを守ろう)誰も置き去りにしない世界に向けて」をテーマに、「米軍基地問題」「教会とエイズ・コロナ・LGBT」「人権問題から見た福島第一原発事故」「子どもの貧困」「オンライン広島巡礼」「日本の労働者」など、30の分科会に分かれそれぞれ熱心に学び、理解を深めた。札幌教区正義と平和協議会は、カトリックセンターを会場に、第15分科会「知っていましたか?いま地層処分し

てはいけない8つの理由」を担当。会場と、遠くベルギーからの参加を含め、全国35名の参加で実施された。

北大名誉教授の小野有五さんが講演し、「核のゴミ」の地層処分の危険性について、具体的に分かりやすく説明して下さった。



また、寿都町で「文献調査受け入れ」の反対を訴えている住民の方がズームで参加され、現地の切実な声を伺った。

続いて、この社会の現実を聖書に照らして読み解き、「時のしるし」を見分け、どう応えるべきか、みことばを通して「祈りの集い」を持った。

2日目は、分かち合いとして、前日の学びで、明らかにしたことを参加者それぞれがまとめ、今後の具体的な行動指針を立てる作業を行なった。

大会の最後は、前田万葉 大阪大司教と勝谷太治 日本カトリック正義と平和協議会責任司教の司式による派遣ミサが行なわれ、大会参加者全員の行動計画がエンドロールとしてYouTubeで配信された。

オンラインでの開催であったが、今後の大会運営に向けて、大変意義深い全国会議となった。

(札幌教区正平協 山口雄司)

外国人受刑者支援の始まりは、2007年7月、聖イグナチオ教会の信徒から札幌刑務所に収容されている外国人受刑者(日系ブラジル人)と面会して欲しいという依頼だった。肩書で、受刑者との面会が再びできるようになったのである。

そして、2021年10月、人生の半分以上を日本で過ごし、その大半を札幌刑務所で過ごしたSさんが出所することになった。出所前の面会は、帰国に向け、必要な物の準備と帰国後の生活に不安を抱えるSさんの話を聞くことだった。出所後、Sさんは数日を札幌の入管収容施設で過ごし、その後、でも私たちは領事館の代理人としてSさんに会うことができた。Sさんは無事帰国し、日本から持ち帰ったパソコンでメールを送ってくれた。

ともにおまわります

刑務所訪問

2015年12月、以前面会をしていたFさんが刑期を終えて、出所した。ただの知人である私たちは刑務所や入管収容施設に何度も問い合わせたが、何も教えてもらえず、入管施設に移送されたFさん本人からの連絡でその事実を知った。Fさんは、ブラジルへ強制送還される前にどうして日本にいる家族と会いたかったのか、東京カトリック国際センターのスタッフに手続きを依頼し、Fさんはほんの数日だけ仮放免となり、思いを成し遂げて、帰国した。このことがきっかけとなり、私たちは受

刑者と文通を重ね、在東京ブラジル総領事館の協力を仰ぐことにした。その結果、2017年6月、私たちはブラジル総領事館の代理人という肩書で、受刑者との面会が再びできるようになったのである。そして、2021年10月、人生の半分以上を日本で過ごし、その大半を札幌刑務所で過ごしたSさんが出所することになった。出所前の面会は、帰国に向け、必要な物の準備と帰国後の生活に不安を抱えるSさんの話を聞くことだった。出所後、Sさんは数日を札幌の入管収容施設で過ごし、その後、でも私たちは領事館の代理人としてSさんに会うことができた。Sさんは無事帰国し、日本から持ち帰ったパソコンでメールを送ってくれた。それだけで幸せいっぱい気持ちになっていたところに委員会宛てに総領事館から一通の封書が届いた。数年前からクリスマスカードが届いていたので、今年は早いなと思うながら開き、中を見て、驚いた。そこには総領事のサインがあり、委員会へのお礼の言葉がポルトガル語と日本語で書かれていた。委員会を重要なパートナーとして認定し、持続的な協力を依頼するであった。これまで刑務所訪問に関わって下さった方々に心から感謝。(西 千津)

北のシスターズ

宣教のために学校教育を

殉教者聖ゲオルギオのフランシスコ修道会

札幌マリア院



2019年に私たちの修道会は創立150周年を迎え、2020年には来日100周年を迎えました。コロナパンデミックのために来日100周年記念の感謝の集いは中止しましたが、来日の時以来ずっとお世話になっているフランシスコ会の皆様には、心から感謝申し上げます。また、先に札幌に来ていらしたマリアの宣教者フランシスコ修道会の皆様にも、来日時からお世話になりました。

私たちが修道会は北ドイツのオランダ国境に近いテュイネという村で1869年に創立され、貧しい子どもたちの教育や病人のお世話をしていました。1907年に札幌に宣教師として派遣されたキノルド神父様たちが、宣教のために学校教育を始めようとされたことが、私たちがここに存在している原点です。1914年にドイツを出発しましたが、途中で第一次世界大戦が勃発し、スエズからドイツへ戻りました。戦争後、1920年に再度出発して当初の目的通り札幌へ来ました。

来日以来、ずっと札幌の現在地にあります。キノルド司教様が用意してくださったこの地で来日5年後の1925年に、北海道で初めての5年制高等女学校「札幌藤高等女学校」を開設しました。高等女学校の制度の下では、いかなる宗教活動も校内で行うことは認められませんでしたが、希望者に寄宿舎や修道院応接間などで、放課後にカトリックの勉強をする機会を与えました。

戦後は新制度の中学・高校となり、さらに日本の復興のために人材養成が急務で、戦後2年目に専門学校をつくり、国語と家庭科の教員養成を行いました。1950年に新たに設けられた短期大学制度により、国内で最初の短期大学の一つとして、英文科・国文科・家政科を、その後1961年には4年制の藤女子大学（英文学科・国文学科）を設けました。

さらに戦前の早い時期から幼児教育への関与が求められ、1934年に小樽に、1938年に札幌に幼稚園を開設しました。

戦後たくさんのお入会者に恵まれ、あちこちの教会幼稚園にも協力を求められて派遣しました。社会福祉の仕事も始めました。しかし、少子高齢化社会の中で召命も減少し、現在札幌マリア

院では数名のシスターのみ学校で働いています。殆どのシスターは退職後の祈りの生活で、教会や人々のためにご奉仕できることを感謝しています。



「コミュニティショップ

マンマルーナオープン!

社会福祉法人雪の聖母園が経営するコミュニティショップ「マンマルーナ」(同施設として「そらち障がい者支援センター」及び「雪の聖母園法人本部」が設置されている)が、11月3日に上杉昌弘神父(当法人理事長)により祝福式が行われオープンした。雪の聖母園で製造している月形産の大豆を使った「まんまるなっとう」や利用者の手作りの作品、芋やカボチャなどの野菜販売、カフェではカレーライスやうどん、蕎麦などのランチや砂川市にある岩瀬牧場のシエラトも食べられる。

店内には雪の聖母園の創設者 故・木内藤三郎神父が制作したマリア像が客を見守る。奥のコーナーには、雪の聖母園の歴史を物語る写真集や木内神父が使用していたものなどを飾るコーナーもある。

* 定休日：日曜日・月曜日。
お問い合わせ先 0126-53-4110



あとかたり 編集後語

「新年に思ふこと」事務局での仕事を与えられて、わたしが住んでいる千歳教会をカトリックセンターの間の往復を始め、もうすぐ2年になります。いつも移動の車の中で、季節の移り変わりを感じるのが、わたしは好きです。いつもの公園が色づいてきたとか、通りを歩く人の服装が、だんだん冬の服になってきたとか、目に映るものが変化してくると、時や季節の移ろいや社会の変化を感じます。とくにコロナ禍で、昨年は少なかった人も、今年はいよいよ回復してきたように感じます。景色の変化といえは、冬になり雪が降ると、運転は大変になるものの、あたり一面が雪景色になると世界がパッと明るくなるのが好きです。こういった変化の中で、わたしたちの教会も少しずつ変化しているように感じます。静謐な雪明りの中でたえず教会もまた、人々の希望の光となるように変わっていくといいなと思いますし、自分自身もまた一緒に変わっていくといいなと思います。新しい年に希望を抱きつつ、祈りのなかで過ごしていけますように。(佐久間力)